



本の魅力を熱く語った早川さん(左)と伊藤さん

震災の半年後に出合った本か
「日本人の叡智」。出る月を待つ
べし。散る花を追うことなけれ
ど、いう江戸時代の学者の言葉に救
われたという。震災の混乱が収ま
らず、心の痛みを抱えていた中で

早川さんは、石井さんと同じ宮城県出身で高校も同窓の縁から執筆。東日本大震災の発生時、福島県の南相馬市立中央図書館に勤務しており、原発事故に直面して死を覚悟した経験を踏まえ2冊を挙げた。

話は、苦楽堂から2014年に発行された本への出合い方のエッセー集「次の本へ」に記された内容から展開。石井さん自身が一冊読んで次に何を読んだらいいか分からぬという高校生の声を多く聞いたことが編集のきっかけで、学者、作家、ジャーナリストら84人が読書本録を寄稿した。

「面白い本と出合う方法」と題したトークイベントで、紫波町情報交流館が主催した。“本先”案内人は、出版社苦楽堂代表の石井伸介さん（神戸市）、岩手の書店から数々のベストセラーを生み出した一関図書館副館長の伊藤清彦さん（一関市）、川崎村立図書館（現一関市）の設立に関わった富士大経済学部教授の早川光彦さん（花巻市）。県内外から約100人が参加した。

本から本へつながっていく面白さを、本好きの人なら経験として知っている。好奇心にまかせてのジャンプ。哲学書から漫画に飛びこともあり得る。これから本を読む人へ、すべてを伝えようという催しが11日に紫波町で開かれた。

本から本へつながる面白さ

紫波町図書館では、次の本
「へ」で紹介された本の展示コー
ナーを設けている=写真=。気
になるテーマ、好きな著名人、
巻末にある出合ったきっかけ
(友達に薦められて、好きな著
者ができて...)などから探す方
法を提案している。

エッセーのタイトルを添えて
並べられた本は、少しずつ増え
て47人分。「歯を食いしばって
読んだ、もう一冊の『イジメの
物語』(猫の事務所)から「風
の又三郎へ」、「彼らは友人同
士だった」(文明の生態史観)

域再生の経済学 豊かさを問い合わせ直す」べ、盛岡市出身の写真家みやこうせいさん後の後世に残る写真集として「羊の地平線」から「藍を謳う」へなど感想を交えて例示した。

友人に教えられたのが、震災で卒業式を中止した立教新座高校の校長が生徒に寄せたメッセージで、「これからを生きる君たちへ」に収録されている。

「いかなる困難に出会おうとも、自己を直視すること以外に道はない。いかに悲しみの涙の淵に沈もうとも、それを直視することの他に我々にすべはない」。何度も読み返し涙したという箇所を紹介し、自分にどうってこれからを生きる若い人たちが希望であると語った。

ジャンプの極意とは 紫波で催し

域再生の経済学、豊かさを問い合わせ直す」へ、盛岡市出身の写真家みやこうせいさんの後世に残る写真集として「羊の地平線」から「藍を謳う」へ――などを感想を交えて例示した。伊藤さんは、明治大ラグビー部元監督による「前へ」、「釣りキチ三平」で知られる漫画家矢口高雄さんの「ふるさと」、灘中学校で3年かけて一冊の本を読む授業で使われた「銀の匙」などを紹介。矢口さんの漫画シリーズについては「北東北の暮らしが美しい絵で描かれ、貴重な民俗資料になつて会にもなつた。

ばかりの人に『何か面白い本はないか』と聞かれても対応できない人が、読む傾向を知れば可能。その人に合ったものを薦めていくことができれば」と思いを語り、早川さんも「面白い本について大人が照れずに伝えていくことが大切。そうすれば子供たちはしっかり受け止められる」と期待を寄せた。

トータル後、参加者からは「人生が変わっていたかもしない」「特別な一冊」、学校図書室の在り方などに関する質問も。本から話題が広がり、その魅力を再認識する機

友人に教えられたのが、震災で卒業式を中止した立教新座高校の校長が生徒に寄せたメッセージで、「これから生きる君たちへ」に収録されている。

「いかなる困難に出会おうとも、自己を直視すること以外に道はない。いかに悲しみの涙の淵に沈もうとも、それを直視することの他に我々にすべはない」。何度も読み返し涙したという箇所を紹介し、自分にどうってこれからを生きる若い人たちが希望であると語った。

○ ○

会場には、さまざまな本が持ち込まれた。早川さんは、本のつながり方として「地方消滅 東京一極集中が招く人間急減」から「地

の皆さんば、2人がさまざまな本を読んでいることに驚いていると思う。ジャンルも幅広いが、書店ではこうした本の出会いが可能か」と問題提起。欲しい本が探しにくい棚のつくり、書店員や司書の専門知識の不足といった現状が話され、全国展開する大型書店の増加で地元の本が販売されなくなっているという問題も指摘された。

書店で働いていた当時、POP（ポップ）を活用してきた伊藤さんは、「薦めたい本の周辺に関連する本を置いて興味を引くようにした」と工夫を紹介。早川さんは、出版社や本の形状にかかわらず利便性に配慮した棚として、川崎図書館の取り組みを挙げた。

若い人たちに本の面白さを伝える

法を提案している。エッセーのタイトルを添えて
並べられた本は、少しずつ増え
て47人分。「歯を食いしばって
読んだ、もう一冊の『イジメの
物語』（猫の事務所）から「風
の又三郎へ」、「彼らは友人同
士だった」（文明の生態史観）
（月曜休館）

展示了トーキイベントを前に
始まり、一部は貸し出されるな
ど来館者の関心も高い。それぞ
れの思いをたどりながらもう一
度本と出合う、そんな楽しみ方
もありそうだ。展示は29日まで

説明を受け、石井さんは「会場